

存命中は大臣：死後、神となる

903年に亡くなり、その後天神さまとして神格化された菅原道真公（845～903年）は、平安時代（794～1185年）の学者であり政治家でした。中流の貴族の学者の息子である道真公は、家系のつながりではなく、自身の知性によって、宮中の上級職である右大臣にまで昇進しました。道真公はその成功により、彼より家格が上で敵対する左大臣の藤原時平の怒りを買いました。時平は道真公に対し嘘の告発をでっち上げたために、道真公は京都の宮中から追放されることになりました。当時の中国や韓国からの使者を受け入れていた、九州におかれた役所である大宰府に左遷されたのでした。

道真公は京都を去る前、当時の醍醐天皇の父である宇多上皇に対し、汚名をそそいでほしいと懇願しました。道真公が滞在した本州最後の土地が、当時、行政機関がおかれていた地方都市の防府だったのです。道真公は、血族関係にある地元の土師氏から温かく迎え入れてもらえました。道真公は天皇から無実の罪が晴れた知らせがくることを願い、長く防府に逗留しましたが、結局、気が進まないまま、九州に渡ることになりました。

901年、道真公は太宰府に到着し、それからちょうど2年後の903年に亡くなりました。道真公が亡くなった日、防府で奇跡が起こりました。海には光が立ちのぼり、近くの山の頂には神秘的な雲がたなびいたと伝わっています。人々は、本州最後に立ち寄り、無実の知らせを待ち続けたいと願ったこの防府の地に道真公の魂が、死して戻ってきたと信じたのでした。そして道真公の魂が戻ってきたのであれば、その魂を鎮める場所が必要になると考え、道真公が亡くなってからわずか1年後の904年に、防府天満宮が創建されました。